

青森県内高等学校所蔵考古資料

杉野森淳子¹⁾

Archaeological material in the Aomori prefecture high school collection

Junko SUGINOMORI

キーワード：考古資料、高等学校 考古系クラブ、青森県、歴史教育

はじめに

平成 26 (2014) 年に九州国立博物館にて、高等学校にゆかりのある考古資料を紹介する「全国高等学校 考古名品展」が開催された。国立博物館として初の試みであり、九州をはじめ日本各地の高等学校から出品されている。

かつて昭和期には、高校生による部活動やクラブ活動 [以後、考古系クラブと明記] の考古学研究が盛んであった。この活動による調査記録や考古資料は地域の歴史を語る貴重な資料であり、当時の地域教育の拠点である高等学校が地域の歴史解明の一翼を担っていたことを表している。これらの資料は今日の学校教育では活用される機会は少なくなり、高校生が考古学に関わる機会も限られている。このような中でこの企画展は、高等学校の考古資料を公開することで社会科教育としての考古学に新たな光を当てるものである。

この企画展は 3 回開催され、東北地方からは平成 28 年 (第 2 回) には秋田県立大館鳳鳴高等学校が、平成 30 年 (第 3 回) には当館で保管している青森県立名久井農業高等学校所蔵資料が出品された。

この国立博物館の企画展をきっかけに、当館考古分野では、青森県内の高等学校で所蔵している考古資料の調査を行っている。現在、文献から高校生の調査記録をたどり、高等学校に考古資料の有無を確認しはじめている。当館には名久井農業高等学校のほかにも県内高等学校所蔵資料が保管されている。今回は、これらを中心に県内の高等学校所蔵資料について紹介する。

1 県立名久井農業高等学校所蔵資料 (青森県立郷土館保管) [図 1 ~ 4]

当館では県立名久井農業高等学校 (以下、名久井農高と表記) 所蔵資料 28 点を昭和 54 (1979) 年から保管している。内訳は、昭和 31 (1956) 年に県重宝となった縄文時代早期の尖底土器 1 点 (図 1)、縄文前期の円筒土器 1 点、縄文晩期の岩偶 1 点 (図 2)、奈良時代と平安時代の土師器 24 点、平安時代の須恵器 1 点である。これらの資料は昭和 20~30 年代に南部町 (旧名川町内および旧福地村内) で発見されたものである。このうち、円筒土器 1 点と奈良時代の土師器 4 点の 5 点が第 3 回全国高等学校考古名品展に出品された (図 3・4)。

県重宝の尖底土器は、昭和 28 (1953) 年秋に南部町 (旧名川町) 森越字野月遺跡 [註 1] の、水田と台地の境の崖面から採取されたものである。口径 11.5cm、高さ 14cm の早期中葉 (約 9000~8000 年前) の小型尖底土器である。文様は貝殻腹縁文を主体とする。口縁部の透かし、胴部に巡らす小隆起帯、ごく小さな平坦面のある尖底など、この地域には見られない特徴をもっている。この形状は関東地方の茅山下層式土器に類似するが、この時期に透かしのある土器は全国的にも稀である。この特異な形状の尖底土器は発見当初から注目され慶応義塾大学民族学考古学研究室の江坂輝弥氏が紹介し (江坂 1955・1958)、『縄文土器大成』など数々の考古学書籍に取り上げられている。

註 1) 出土地は、当初は森越字館場 (または館野) とされていたが、昭和 36 年の調査で森越字野月と判明し野月遺跡となった。

円筒土器は、南部町 (旧福地村) 福田遺跡で発見された縄文前期の円筒下層 C 式の深鉢 (口径 9cm・高さ 27cm) である。このほかの岩偶、奈良・平安時代の土師器・須恵器は出土地不明である。

名久井農高は南部町 (旧名久井町) 下名久井地区に所在し、農場など広大な敷地を有する。過去の記録をたどると同校には考古系クラブはなかった。当初、これらの資料は同校敷地内で発見されたものと思われたが、敷地外であった。これらの資料が同校に収蔵された経緯については記録類が少ないためよくわかっていない。当時は、全国的に各自治体に文化財担当部署や博物館が少なく、地域の小中高校の教諭がその役割を担っていたことから、学校に資料が持ち込まれたことが考えられる。

なお、昭和 29 (1954)・33 (1958) 年に名久井農高の生徒が南部町 (旧名川町) 虚空蔵遺跡の発掘調査に参加していた記録がある。昭和 29 年 11 月 14・15 日に 4 名が (江坂 1958)、昭和 33 年の 4 月 29 日から 5 月 2 日の 5 日間の調査のうち 5 月 1 日には三年生が調査に加わっている (江坂 1960)。この調査は慶応義塾大学が主体となって行い、県立八戸水産高等学校教諭であり、県の考古学研究の先達である音喜多富寿氏が協力をしている。当時、音喜多氏は県南地域の発掘調査の中心的存在であり、氏の調査には八戸市周辺の考古系クラブの高校生が参加していた。名久井農高の生徒は音喜多氏と関わりのある教諭を通して調査に参加してい

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査 (〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14)

たことが考えられる。

2 県立青森高等学校旧蔵資料 [図5～7]

平成22(2010)年に同校図書準備室等に保管されていた考古資料が当館に寄附されている。125点あり、内訳は縄文土器111、磨製石斧1、石棒1、石製品2、土師器8、須恵器1、支脚1である。

これらは同校社会研究部が昭和20～30年代に調査、収集したものである。社会研究部は、社会一般について調べることを目的として、昭和23(1947)年に創部された。1950年代には、「時事班」「地理班」「統計班」「考古班」に、昭和34年には「考古学班」「地理班」「郷土史班」「社会班」に分かれて活動している。

部活動の内容は、毎年発行される『生徒会誌』に記録されており、研究部独自の会誌『郷土室』を昭和33年から発行し、ここには調査報告や研究論文が掲載されている。

◇『生徒会誌』

昭和31(1956)年の『生徒会誌』4号に記載されている考古班の活動は、「○横内遺跡の単独発掘 ○三内遺跡慶應大援助発掘 ○津軽地方国宝重要文化財指定物めぐり ○青森平野周辺(主として深沢地区)遺跡分布調査 ○遺跡遺物の調書作成、並びに遺物の復元」などである。また同号には「細越館遺跡に関する私考」の題目で生徒の研究発表が掲載され、翌年の5号には、横内遺跡の調査概要が報告されている。

昭和34(1959)年の7号には「○青森市横内字四ツ石縄文後期遺跡第5回発掘 ○慶應大考古学教室主催青森市三内稲荷林縄文中期竪穴住居跡発掘援助参加(註:三内稲荷林は、現在の三内丸山遺跡の一部) ○青森市周辺の遺跡の実地調査、試掘、表面採集」を行ったことが記されている。

◇『郷土室』

昭和35年の第3号には青森市浪館平岡遺跡調査報告が、昭和36年の第4号と昭和37年の第5号には青森市三内遺跡調査報告が掲載されている。このほか、弘前大学教育学部が主体となった岩木山麓緊急発掘への参加や、青森県の文化財や考古資料の紹介などがある。

浪館平岡遺跡をはじめ、研究部単独の高校生主体の発掘調査は昭和35年まで行われていた。しかし、高校生を主体とする発掘調査は、昭和35年途中から停止となった。これは当時、文化庁から青森県に「文化財保護法上、高校生単独での調査は好ましくない」との指導を受けたことによる。これ以降、県内では高校生主体の発掘調査は不可能となったが、大学または自治体主催の発掘に参加することで調査を続けていた。青森市教育委員会主催の三内遺跡発掘調査には、昭和36年には青森高等学校(以下、青森高校と表記)のほか、青森一高(県立青森北高等学校の前身)考古学部、青森中央高等学校郷土部も参加している。さらに翌年には青森工業高等学校社会研究部も加わった。

これらの記録によって、昭和20～43年頃は部活動が盛んだったことがうかがわれ、その後は小規模ながら続けられたが、平成年間には部活動は無くなっている。

社会研究部に所属していた生徒のなかには、大学で考古学や民俗学・歴史学を学んだ後、その知識を活かして県内自治体で文化財専門職員として、また地域の研究者として文化財の調査・保護活動に携わっている方が多い。

青森高校旧蔵資料のなかで、注目されるのは青森市細越館遺跡出土の古式土師器4点である(図7)。県内では数少ない古墳時代の遺物であり、学術的に重要である。これらは、寄附前は同校図書室に展示されていたものである。同校でも資料の価値を理解し、生徒にその価値を伝えようとしていたのではないだろうか。なお、この4点は今年から当館歴史展示室で公開している。

3 県立青森北高等学校旧蔵資料 [図8～12]

平成27(2015)年に、土器・土器片113点、石器104点が同校から当館に寄附された。資料の多くは校内1階ホールにトロフィーや賞状とともに棚に陳列されていたものである。

県立青森北高等学校(以下、青森北高校と表記)考古学部は、昭和23年の青森市立第一高等学校時代に発足した。発足当時の考古学部顧問、社会科教諭 小野忠明(おのただあきら)氏は日本考古学協会会員であり、全国に知られた考古学研究者でもあった。小野氏は、青森市出身であり、東京美術学校を卒業後、1930年代初頭から平壤博物館学芸員として勤務していた。ここで高句麗古墳をはじめ多数の遺跡の発掘調査に携わっていたこともあり、日本と朝鮮の考古学界・美術界では第一線の研究者として知られていた。戦後は、社会科や美術教諭として青森市内の高校に勤務していた。

この小野氏の指導のもと結成された考古学部の活動は年を重ねるごとに盛んとなり、最盛期の部員は30名を超えている。当初は、夏休みなどを利用して高校単独での発掘調査も行っていたが、昭和36年以降は大学や青森市教育委員会主催の発掘調査に参加していた。昭和53年には、当館で行った尻八館遺跡発掘調査に生徒が参加し、高校にある土器の整理に当館学芸員が協力をしている。

部活動は、小野氏以後も部の顧問が考古学に精通した教諭であったことや、部に所属していた多くの卒業生の協力をうけ、昭和

62年から平成2年の休部期間を乗り越え、平成9年まで続いた。青森高校と同じく卒業生の中には、現在も考古学に携わり、自治体の発掘調査専門員として、また地域の研究者として活躍している方も多数いる。

残念なことは、昭和52年に部室が火災に遭い多くの遺物や記録類が焼失したことである。平成27年に、当館に寄贈された資料は、この難を逃れた数少ない貴重な資料である。

考古学部の活動は生徒会誌『ともづな』、考古学部会誌『習北考古』等でたどることができる。

◇生徒会誌『ともづな』

昭和35年創刊の年度末に発行される生徒会誌に一年間の活動報告が掲載されている。創刊号には部員の研究論文「青森市周辺における縄文式遺跡」が発表されている。昭和43年の9号には部員の「青森県の土器の変遷」論文のほか、部顧問である井上久氏の随筆「地中の宝物」も掲載されている。

活動記録から昭和36年以降、青森市教育委員会主催の発掘調査に青森市内の各高校と合同で参加していることがわかる。

◇『習北考古』

昭和62年からの休部から平成3年の部活動再開を契機に、考古学部の生徒が中心となり作成した小冊子である。平成5年から平成9年まで発行された。平成期に青森市内で採集した資料や昭和期に収集した資料を図化して紹介している。

上記のほかに、『うとう』74号（昭和45年／1970、青森郷土会発行）には、部顧問である井上久氏が青森北高校で保管している三内遺跡出土の板状土偶2点を紹介している（図11）。この2点には「三内」、「三内A」と出土地点が記されている。

調査は青森市内・戸山・宮田地区などで行われたほか、平内町や七戸町・つがる市にも及んでいた。旧蔵資料217点のうち、64点〔土器43点、石器21点〕の出土地点が判明している。青森市内三内遺跡・安田遺跡・長森遺跡・玉清水遺跡、平内町槻木遺跡、七戸町二ツ森貝塚などである。同校会誌や他の考古学文献から、これらの多くは昭和25～42年の発掘調査に関わるものと考えられる。

なかでも、「三内」「三内A」と記されている土器・石器は、青森高校社会研究部会誌『郷土室』に記載されている調査記録から、昭和36・37年に参加した三内遺跡発掘調査時に青森北高校考古学部が担当した調査区の出土資料と考えられる（図6）。

顧問の井上久氏は、慶応義塾大学で考古学を専攻し、社会科教諭として採用されている。勤務地の高校では考古系クラブ活動を積極的にを行い、小野忠明氏とともに数多くの発掘調査を手がけ、青森市文化財審議会委員として考古学や文化財保護活動に活躍していた。このような経歴から、井上氏は昭和47年に青森県教育庁文化課県立郷土館準備室へ異動となり、当館開館時から昭和50年まで考古分野学芸員でもあった。

また、当館には蓬田村小館(1)遺跡の擦文土器の甕がある（図6）。この資料は、考古学部に所属していた卒業生が昭和46年に採集したものである。この甕は11世紀代の青森と北海道の関わりを示す資料で、ほぼ完全な形で残っていることから、当館で借用し歴史展示室にて常設展示をしていたところ、近年当館に寄附された。

4 県内の高等学校所蔵資料の状況

現在、県内の高等学校には考古系クラブは皆無である。平成期には青森北高校のほか、青森山田高等学校に考古学研究部があった。報告書等の考古学文献をたどると、県内の多くの高校に考古系クラブがあり、発掘調査に参加していたことがわかっている。

*青森工業高校、青森中央高校、青森商業高校、青森西高校、青森明の星高校、弘前工業高校、弘前南高校、弘前実業高校、八戸商業高校、八戸高校、光星学院高校、三戸高校、むつ工業高校、五所川原高校、五所川原工業高校、金木高校など *ここでは当時の校名を明記している。

大半はクラブ活動が停止してから長い年月を経ている。部活動で収集された資料は現在どのような状況にあるのか。歴史授業での考古学資料の取り上げ減少により考古学への関心が少なくなったことや、校舎の改修なども行われている高等学校もあることから、資料が確認できない場合が多く、その存在が危ぶまれる。

おわりに

明治以降、学校には、考古資料をはじめ民具や歴史資料・自然資料などの博物学の知識をもっていた教諭もいたことから、これらの資料の専門家としての役割を学校教諭が担っていたこともあり、郷土資料の多くは地域の小中学校や高校に集まっていた。

昭和40年代はじめまでは各自治体には文化財を専門に扱う部署や専門職員が少なく、地域に博物館・資料館もない頃である。

戦後の昭和20～30年代、発掘調査は大学が主体となって実施し、高校生が発掘に協力する体制が大半であった。県内でも発掘調査は、在京の大学（慶応義塾大学、早稲田大学、東京大学など）が主体となって短期間で行い、地元の高校生が発掘作業に携わっていた。この時代の考古学研究は高校生を中心に行われていたのである。この時代の高校生の活動は、本県の考古学史を語るうえで忘れてはならない。

近年、全国的に学校所蔵の考古資料の危機が問題として取り上げられており（図13、『考古学研究』64—65）、国立博物館をはじめ各地の博物館や自治体で資料の確認や整理・活用に取り組みは始めている。当館においても郷土資料の収集と活用の一貫として、高校の考古系クラブ活動資料を中心に、小・中・高等学校に保管されている資料の収集に努めていきたい。

謝辞

資料調査や情報収集に協力いただいた学校関係者をはじめ、原稿の査読者である福田友之氏に感謝を申し上げる。

参考文献

青森県考古学会 2002『青森県考古学関係文献目録』青森県考古学会 30周年記念誌
 青森市 2006『新青森市史 資料編1 考古』
 井上 久・小笠原好彦 1970「青森市三内遺跡出土の土偶」『うとう』74 青森郷土会
 江坂輝弥 1955「條痕文土器文化の展開」『史想』2号 京都教育大学考古学研究会
 江坂輝弥 1958「青森県三戸郡館場遺跡」『日本考古学年報』7 (1954年度版) 日本考古学協会
 江坂輝弥 1960「三戸郡名川町大字平小字前ノ沢出土の合口かめ棺について」『奥南史苑』4 青森県文化財保護協会八戸支部、八戸社会経済史研究会
 江坂輝弥 1982『縄文土器文化研究序説』六興出版
 岡本 勇編 1982『縄文土器大成1 一早・前期』講談社
 九州国立博物館 2014『全国高等学校 考古名品展 2014』
 九州国立博物館 2016『全国高等学校 考古名品展 2016』
 九州国立博物館 2018『全国高等学校 考古名品展 2018』
 剣持輝久・大竹幸恵・大下 明 2018.10「歴史教育と考古学—社会科・歴史教科書等検討委員会の活動と課題—」『日本考古学』第47号 一般社団法人日本考古学研究会
 考古学研究会 2017 特集「学校と考古学」『考古学研究』64-3
 考古学研究会 2018 特集「学校と考古学」『考古学研究』64-4
 考古学研究会 2018 特集「学校と考古学」第2部『考古学研究』65-1
 考古学研究会 2018 特集「学校と考古学」第2部『考古学研究』65-2
 村越 潔 2007『青森県の考古学史—先覚者の足跡を尋ねて—』弘前大学教育学部考古学研究会OB会



図1 県重宝 尖底土器

図3・4は『2018全国高等学校 考古名品展』出品



図2 岩偶（『馬淵川流域の遺跡調査報告書』1997 青森県立郷土館より）



図4 奈良時代の土師器



図3 円筒土器

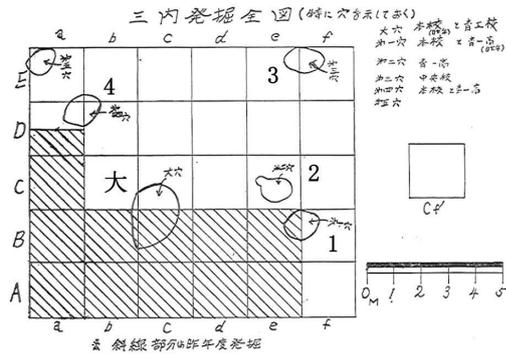
青森県立名久井農業高校所蔵資料



1960

青高社会研究部

図5 社会研究部誌『郷土室』



大穴 青高と青工高
 第一穴 青高と青一高
 第二穴 第一高
 第三穴 青中央高
 第四穴 青高と第一高
 と各校の担当場所が明記されている

図6 昭和37年三内遺跡調査全体図（『郷土室』5号より）



・青森高校図書室に展示されていた土器

図7 古墳時代の土器
 ・細越館遺跡

県立青森北高等学校考古学部 活動年表

年 月	部活動内容 □は学校関係
昭和21年	□小野忠明氏が青森市立第一中等学校に赴任
昭和23年	□学校制度改正により、青森市立第一高等学校に編入 考古学部発足。顧問は小野忠明先生（日本考古学協会会員）。青森市周辺の遺跡の分布調査を実施
昭和25年 8月 8月	慶応大学 藤田亮策教授の指導により、平内町 槻の木遺跡 、青森市長 森遺跡 を発掘調査 慶応大学 清水潤三助教授の木造町 亀ヶ岡遺跡 発掘調査に参加 *後に刊行された『亀ヶ岡遺蹟』（三田史学会1959）に当校所蔵の編物1点が掲載されている
昭和26年 8月	藤田亮策教授と津軽半島の先史時代の遺跡を分布調査。案内人は考古学部OB蒔苗三郎氏
昭和27年 4月	小野忠明氏が「昭和27年度調査概要 津軽半島に残存する縄文遺跡」を著す /この年、部員は30名
昭和29年	天間林村二ツ 森貝塚 を試掘調査。骨角器・人骨が出土し注目される
昭和31年 8月	平泉中尊寺に研修旅行
昭和32年 1月	青森一高考古学協会結成
昭和35年	□生徒会誌『ともづな』創刊。『ともづな』創刊号に部員の研究論文「青森市周辺における縄文式遺跡」収録
昭和36年 10月	蓬田村瀬辺地遺跡を探索（5・6月）、大湯環状列石見学（8月） 青森市教育委員会の三内 遺跡 発掘調査に参加（青高、青中央高との合同調査）
昭和37年 7月	青森市教育委員会の三内 遺跡 発掘調査に参加（青高、青工高、青中央高との合同調査） 『ともづな』3号に文化祭の写真掲載
昭和38・39年	青森市教育委員会の四ツ石 遺跡 発掘調査に参加（市内の高校合同調査）
昭和40・41年	青森市教育委員会の玉清水 遺跡 発掘調査に参加（市内の高校合同調査）
昭和42年	青森市教育委員会の小三内 遺跡 発掘調査に参加（市内の6高校合同）。浪岡町周辺の遺跡調査 /部員は26名 部顧問は井上久氏（昭和44年まで）
昭和43年	青森市教育委員会の野木和 遺跡 発掘調査に参加（市内の高校合同） 『ともづな』9号に研究発表論文「青森県の土器の変遷」（部員）、ぜひいつ「地中の宝物」（井上久教諭）収録 /部員は16名
昭和44年 4月 5月 11月	□県立高校へ移管し、県立青森北高等学校となる 青森市教育委員会の細越 遺跡 、沢山 遺跡 発掘調査に参加（市内の高校合同調査） 青森市教育委員会の玉清水 遺跡 発掘調査に参加（市内の高校7校参加） 部員24名。当時の部員1名は、青森県埋蔵文化財専門職員として勤務した
昭和45年 10月	青森市教育委員会の山野峠 遺跡 （7月）・玉清水 遺跡 （8月）発掘調査に参加（市内の高校合同調査） 青森北高主催「蓬田遺跡見学」を実施し、市内の高校から40名参加
昭和46年 6月 7月 8月	青森市造道で早稲田大学桜井教授の調査に参加し、歴史時代の住居跡を発掘。 沢田A遺跡 として新規登録される 青森市教育委員会の大浦 遺跡 発掘調査に参加 早稲田大学、札幌大学の蓬田村小館 遺跡 の調査に参加 小館遺跡にて擦文土器が発見される。発見者は考古学部OB。資料は青森県立郷土館歴史展示室で展示中 板柳町公民館、五所川原市前田野目遺跡、函館博物館を見学。函館遺愛女子高校考古学部訪問 /部員は30名
昭和47年 8月	蓬田村瀬辺地 遺跡 発掘 青森市孫内 遺跡 緊急発掘調査（7・8月）。調査主任は小野忠明氏。縄文中・後期の住居跡、土器、土偶などを発見 早稲田・慶応・明治大の合同発掘、蓬田村小館 遺跡 発掘に参加 /部員19名
昭和49年 夏	青森県教育委員会の青森市近野 遺跡 発掘調査に参加
昭和50年 5月	三内丸山 遺跡 発掘
昭和52年	部室火災。発掘品、書籍焼失 /部員40名
昭和53年	文化祭で茶店「古代」を開く /部員23名
昭和54年	県立郷土館学芸員の協力で学校所蔵の土器の分類を行う。県立郷土館の尻八 館遺跡 の発掘調査に参加（8月）/部員23名
昭和57年	野辺地町立歴史民俗資料館を見学。案内は地元の考古学研究者 瀬川滋氏
昭和58年	森田村歴史民俗資料館、平賀町立郷土資料館を見学
昭和59年	□男女共学となる。/森田村石神 遺跡 の発掘に参加（8月）。八戸市内の博物館を見学（8月）/部員6名
昭和60年	亀ヶ岡遺跡見学。『ともづな』25号に文化祭の写真掲載
昭和61年	田舎館村垂柳遺跡発掘調査を見学
平成2年 7月	文化祭で「考古学の歩み」について展示
平成3年	休部から復活。遺跡見学や土器収集を行う
平成4年	創部45周年。遺跡見学や土器収集を行う
平成5年 3月	部誌『習北考古』を創刊。油川城跡を中心に活動。三内丸山遺跡で発掘体験。OBによる講演会を実施 当時の部員は、青森県で埋蔵文化財専門職員として勤務
平成6年	□文化講演会開催 演題「三内丸山遺跡と報道について」講師は朝日新聞記者 /三内丸山 遺跡 発掘調査に参加
平成7年	羽州街道沿いの遺跡探索
平成8年	三内丸山遺跡でボランティアガイド活動。油川城跡遺跡、内真部遺跡、細越館遺跡の探索
平成9年	三内丸山遺跡でボランティアガイド活動。『習北考古』発行。『ともづな』37号に文化祭の写真掲載

